

看護学生の老人観に関する研究

——老人看護学の観点から——

老人看護学 菅原富子、高橋フジェ

Image of the Old Carried by Nursing Students: Study from
a View Point of Gerontological Nursing

Tomiko SUGAWARA and Fujie TAKAHASHI

要 旨

老人との共同生活体験の有無が看護学生の老人観にどのように影響しているか、また老人福祉施設での実習を含む老人看護学の教育カリキュラムの消化の中で、学生たちの老人についての意識がどのように変化しているかを知る目的で調査を行い、その結果についていくつかの側面から検討した。

調査は岩手女子看護短期大学平成6年度3学年62名を対象とし、アンケート形式および文章形式の両様のスタイルによった。その結果60%の学生が老人との共同生活体験を有しており、その体験は彼らの老いのイメージの形成にとってプラス方向への影響を与えていることが分かった。また特別養護老人ホームにおける実習後のレポートを通して、実習が多く学生の老人観に深刻な影響を及ぼしたこと、彼らが看護学生としての自覚と反省をもって、老人観を大きく変え始めたことが分かった。

I. はじめに

看護短期大学に入学するほとんどの学生は、高校卒業後の成人前後の青年期を看護学生として送っている。この時期、看護婦を志す学生たちは人間的に著しい成長の中で、知識や技術としての看護を学ぶだけではなく、彼らの若々しい感性を通して、人間存在の多様性や、生物としての人間と社会的な存在としての人間との間に横たわるさまざまな問題に直面し、自己の内面の襞を増やし、陰影を深めながら、将来の看護婦としての人間形成を進めることになる。とくに彼らが老人看護学を接点として、生物としての人間の老化や精神的、心理的、社会的側面に重心を置いた老いの問題、あるいは高齢化社会の到来など、それまでの人生史において、はるかに遠い存在であった自己の老いを含めて、老化や老人を認識する時間を持つことは、その後の看護婦としての有りようにも、大きな影響を及ぼすことは必至と思われる。老人看護学の教育に携わるものとして、このような観点からそのカリキュラム構成を常に自己批判的に修正

しつつ、より良い教育内容を求めなければならないと考えている。今回、私たちは、学生たちの人生史における老人との共同生活の有無やその体験が彼らの老人観にどのように影響しているか、また老人福祉施設での実習を含む老人看護学の教育カリキュラムの消化の中で、学生たちの老人についての意識がどのように変化しているかを知る目的で調査を行い、その結果について、いくつかの側面から検討した。今後の老人看護学の教育カリキュラムの在り方について、示唆するところが少なくないと考えられるので報告する。

II. 対 象

岩手女子看護短期大学平成6年度3学年62名を対象とした。

III. 方 法

アンケート形式および文章形式の両様のスタイルによる調査を行った。

1. アンケート形式による調査アンケートの

設問は内容から大きく次の3部分に分けられる。

(1) 老人との共同生活体験関連、(2) 老人についての一般的認識関連、(3) 老人看護についての認識関連

これら3部分の設問の構成は以下の通りである。

(1) 老人との共同生活体験関連老人との共同生活の有無(選択)、その期間(年)、共同生活老人との続柄(多重選択)、共同生活時の学生年齢(記入)、共同生活時の老人健康状態(選択)、同居老人現存の有無(選択)、同居老人の現在年齢(記入)、同居老人の介護経験の有無(選択)とその内容(記述)、特定の老人との時間の共有経験の有無(多重選択)、老人関連のボランティア活動経験の有無(選択)とその内容(記述)

(2) 老人についての一般的認識関連老人と認識する年齢(選択)、老人と一般成人との相違の有無(選択)とその理由(記述)、老人にとっての身体的、精神的最大関心事についての認識(5項目多重選択)、自分の将来の老化についての認識有無(選択)、老人についての情報源(3項目多重選択)、“老い”についてのイメージ(記述)

(3) 老人看護関連老人看護における最難問(3項目について記述)、老人ケアについて関心の有無(選択)とその理由(記述)、老人ケアと成人ケアの難易比較(選択)

2. 文章形式による調査特別養護老人ホームと敬荘における実習終了後、その感想を『私にとって老いとは』のテーマで2000字のレポートとして提出させた。調査の結果は“学生の老人観形成における実習の意義”として別括した。

IV. アンケートの結果

①学生の年齢分布：20歳34人、21歳26人、23歳1人、25歳1人

②老人との共同生活の有無：有り37人、無し25人(図1)

③老人との共同生活期間：10年以下は1年

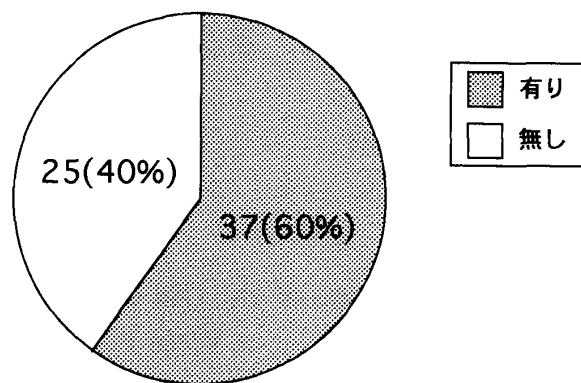


図1 老人との共同生活体験の有無

未満5人を含む14人、10年以上の共同生活を体験している学生は23人で、このうち15年以上は20人である。ほとんどの学生が20歳ないしは21歳であることを考慮すると、これら学生はそれまでの人生の大半を老人との共同生活の中で過ごして来たことになる。幼少時は祖父母も老人とは言えない50歳台であった場合の共同生活を含まれているものと思われるが、感覚的には老人との共同生活ということになる。最長は21年であった。(図2-a)

④共同生活の対象老人の内訳：祖父母22人、祖母11人、祖父3人で、その他大叔母2人である。男性は女性に比べて早世であることが、内訳に反映しているものと思われる。(図2-b)

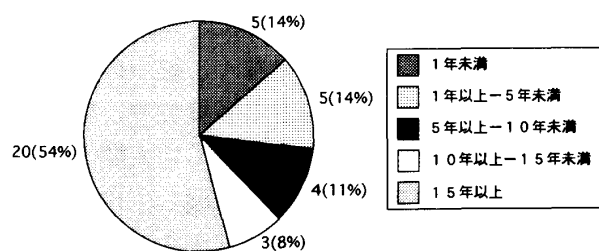


図2-a 老人との共同生活期間

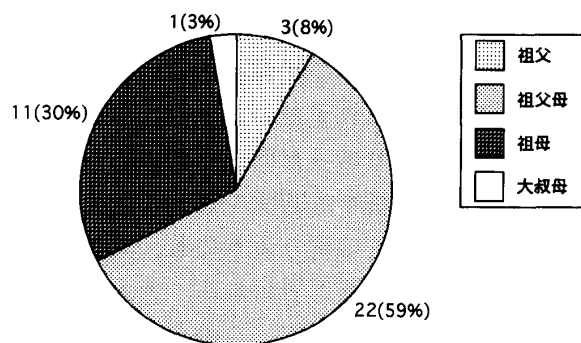


図2-b 同居老人の続柄

⑤同居老人の健康状態：大変健康であったとするものが22人と多いが、13人の学生がときどき病気、または病気がちと回答している

⑥同居老人の存否：34人が現存と回答している。

⑦看護ケア体験の有無：19人が老人との共同生活を通して、介護を体験している。

⑧介護の内容：実際的な内容は、排泄や入浴の介助までを経験したものは少なく、ほとんどが食事や身の回り程度と回答している。続柄が祖父または祖母と孫という関係であってみれば、この内訳は当然であろう。

⑨老人と認識する年齢：50～60歳1人、60～65歳11人、65～70歳23人、70～75歳18人、75歳以上5人

⑩自分の将来の老化についての認識：ほぼ全員が自己の老いについて考えたことがあると回答した。

⑪学生からみた老人にとっての身体的、精神的最大関心事についての認識（設問では老人にとって大変な問題と表現）：下記の18項目の中から優先順位を付けて5項目を選択させた。

a. コミュニケーション困難、b. 依存生活、c. 寒暑がこたえる、d. 記憶の衰え、e. 孤独、f. 差別、g. 死の恐怖、h. 視力の衰え、i. 社会生活疎遠、j. 人生空しい、k. 聴力衰え、l. 身体の痛み、m. 転倒、n. 病気、o. 不安、p. 歩行困難、q. 友人の死、r. 排泄困難

優先順位1としてあげられた項目のうち多いものは、依存生活15、死の恐怖13、病気13である。優先順位2としてあげられた項目のうち多いものは、病気11、孤独10、死の恐怖8、不安7などである。優先順位3としてあげられた項目のうち多いものは、孤独9、依存生活7、死の恐怖7、病気7、友人の死6などである。優先順位4としてあげられた項目のうち多いものは、友人の死7、死の恐怖6、病気6、不安6、依存生活5であるが、コミュニケーションの困難さ5、トイレに行くのが困難5などの生活実感に根ざしたものがあらわれる。優先順位5としてあげられた項目のうち多いものは、依存生活6、

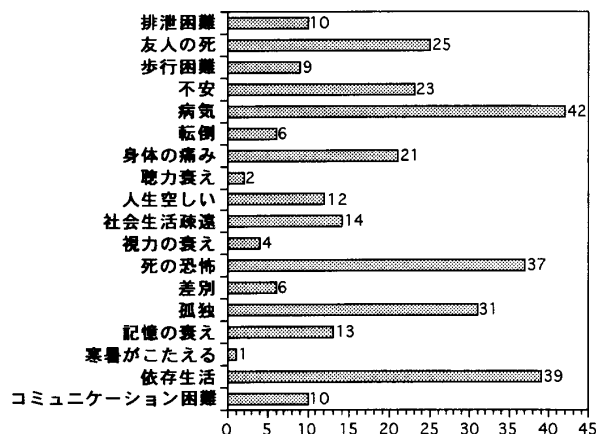


図3 老人にとって大変な問題 1位～5位合計

友人の死6、病気6などこれまで頻出したものに次いで、社会生活の疎遠、低下5や、記憶力の衰え5などが現れる。

多くあげられたものを優先順位に関係なく列挙すると、病気42、依存生活39、死の恐怖37、孤独31、友人の死25、不安23などである。これら選択された項目は老人が実際に感じている関心事と掛け離れているかどうかはこの調査では分からないが、学生の感覚的な老人観を知る上では大変参考になる結果である。(図3)

⑫老人看護における難問3項目：回答は記述式であるが、その内容から以下の3グループに分けることができる。

グループ1；コミュニケーションの困難性をあげたものが最多であるが、その内容をもう少し子細に検討すると老人の心理面、精神面へのアプローチの困難性からくるコミュニケーションの問題と聴力、視力の衰えなど感覚器官の老化からくるコミュニケーションの難しさとに分別される。グループ2；身体的能力の低下がもたらす日常生活への支障の問題、とくに排泄、歩行、疾病、事故、外傷傾向、寝たきりなど、QOLの低下をあげたものが次いでいる。グループ3；老人性痴呆を含む知的能力の低下をあげたものは比較的少数であった。

⑬老人ケアについて興味の有無：無回答1を除く61の内訳は有り56(91.8%)、無し5(8.2%)であった。前問について興味有りとしたグループに、その理由についての設問は回答が記述式であるため、数値的な結果は得られて

いないが、以下の傾向が認められた。すなわち、自分も将来老人になるからというものが最も多く、高齢化社会の到来という社会的視野に立った理由、祖父母や両親の老化をみてなどの理由がこれに次いでいる。老人に親近感をもつからということを経由にあげたものも少数認められた。興味無しとしたグループについて、その理由をみると、5名のうち小児看護を指向するからとした1名を除く4名は老人看護に自信がないことをあげている。将来老人看護の職域に携わるかどうかは別として、このような回答者の存在は老人看護学教育の観点から一つの問題提起といえる。

⑭老人看護と成人看護の困難性の比較：老人看護により困難性が高いとしたものは46(74.2%)、老人においても成人においても、看護の困難性は変わらないとしたもの16(25.8%)あった。老人看護における困難性を高いとした理由は前述の老人看護における難問の項の内容とほぼ重なる。すなわち、成人に比べてコミュニケーションの難しさや疾病傾向が多くなっている。これに対して、困難性は成人看護と変わらないとした回答者のほとんどが、その理由として同じ人間であり、基本は変わらないからとしている。しかし、同じ人間であるという意見は、老人看護に対する未成熟な認識を示しているとも思われ、これも老人看護学教育

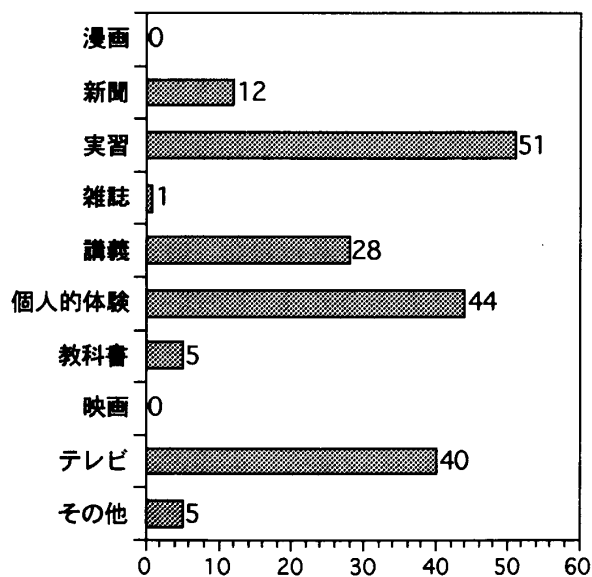


図4 老人に関する情報源

表1 老いのイメージ分類

プラスイメージ	経験豊富、新たな一歩、人間発達過程 自然の流れ、自由な時間、後輩指導 総合的能力向上、目的をもって生きる喜び
中間イメージ	外見の暗さと内面豊富、自分次第 固定観念もたない、明暗混在 衰えと成長と
マイナスイメージ	寝たきり、依存、身体機能低下、死の恐怖 老人病院、孤独、容姿衰え、寂しさ 記憶衰え、暗い、病気、人生終点、汚い 社会生活低下、老いへの恐れ

への問題提起になっている。

⑮老人についての情報源(順位をつけて3項目選択)：1位にあげられたものは個人的体験34(54.9%)、実習13(21%)、テレビ6(9.6%)などである。2位にあげられたものは実習22(35.5%)、テレビ16(25.8%)、講義12(19.4%)などである。3位にあげられたものはテレビ18(29.1%)、実習16(25.8%)、講義12(19.4%)などである。テレビの占める割合が大きいのは、福祉や医療を中心とする老人問題に関する報道番組が最近とくに多く見られるようになったという事情に加えて、若い女性向けのテレビドラマの影響も無視できないかもしれない。(図4)

⑯老いて行くことについてのイメージ：記述式の回答を求めたため、数量的処理はなじまないが、内容からプラスイメージ、プラスマイナス相半ばする中間のイメージ、およびマイナスイメージに分別し、あえて数量化を試みた。(表1) プラスイメージは18(29.0%) プラスマイナス相半ばするものは18(29.0%)、マイナスイメージは26(41.9%)である。(図5)

⑰老人との共同体験の有無からみたアンケート結果

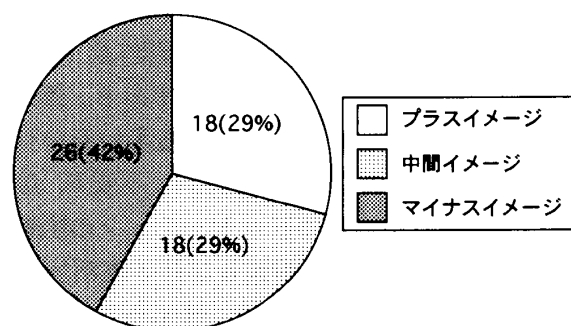


図5 老いの明暗イメージ

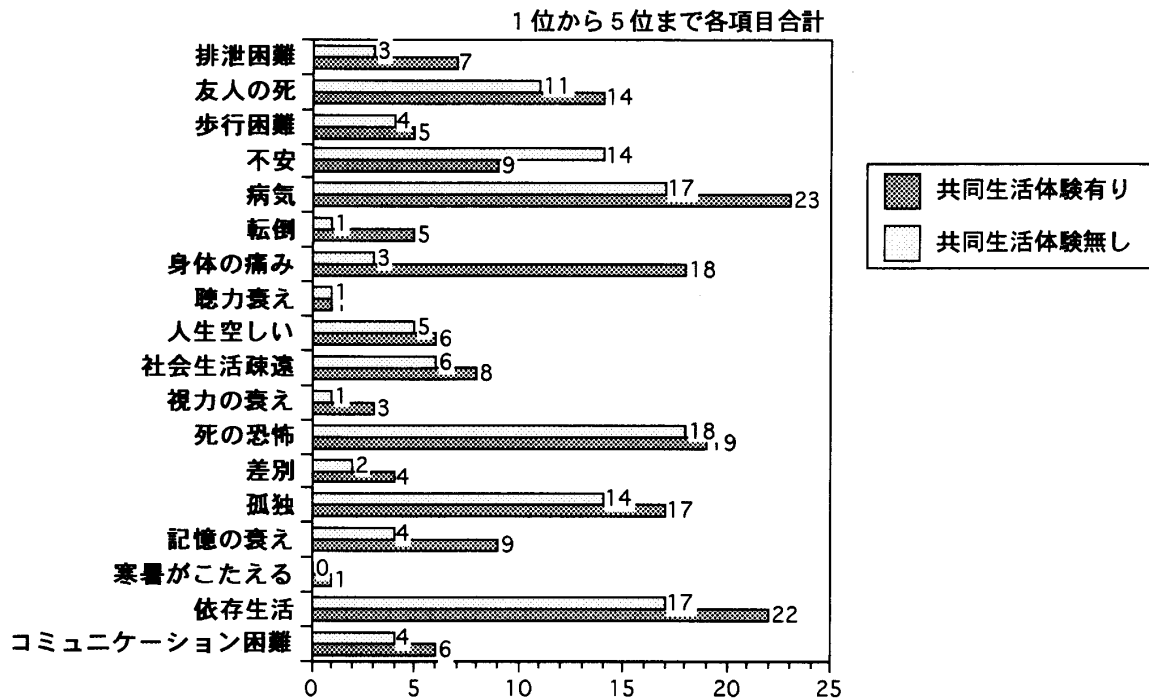


図6 共同生活の有無と老人にとって大変な問題

a. 共同生活の有無と老人にとって大変な問題：共同生活有りのグループで多く認められたものは、身体の痛み、転倒、記憶の衰えなどの項目である。これに対して、総数としては少ないにもかかわらず共同生活無しのグループで多く認められたものは、不安であった。(図6) 有りのグループの身体の痛み、転倒、記憶の衰えなどの項目は、老人との共同生活の中で実際に身近で体験したことが、“大変な問題”として印象深く残っていたものと思われる。一方、無しのグループであげられた“不安”は、抽象的概念であり、老いや老化に対する漠然としたイメージが背景にあるものと思われ、こうした傾向は他の設問に対する回答にも共通するようである。

b. 共同生活の有無と老いのイメージの明暗：老いのイメージを表1に従って、プラスイメージ、中間イメージ、マイナスイメージに分類し、老人との共同生活体験の有無の観点からみると、有りのグループと無しのグループでは、傾向に明らかな差が認められた。すなわち、共同生活体験有りのグループではプラスイメージが35.2%を占めるのに対して、共同生活無

しではプラスイメージの占める割合は20%と低くなっている。(図7) このことは、共同生活体験有りの学生が老人との共同生活を通して、老人の経験の豊かさ、人間的奥行きなど、老人との日常の生活を通して、老人のプラス面を実感していることを示唆している。

⑩老人看護の困難性についての意識程度と老いのイメージ

老人看護と成人看護の比較において、老人看護の方がより困難と回答したものと成人看護と変わりはないと回答した両群を老いのイメージの観点からみると、老人看護を困難としたグループでは老いについてマイナスイメージが相対的に多い。見方を変えれば、老人について暗いイメージをもつ学生には老人看護を困難な領域と

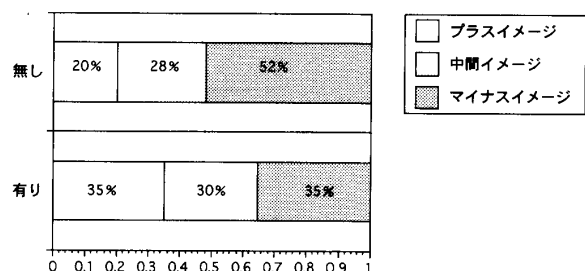


図7 共同生活の有無と老いのイメージ明暗

認識する傾向が認められる。このことも、今後の老人看護学教育における課題であろう。

3以上の調査結果のうち、数量的に比較検討した項目については、 χ^2 検定による統計学的検証を行ったが、対象数が少ないため、有意差は得られず、傾向ありに止まっている。

V. 学生の老人観形成における実習の意義

老人看護学の教育カリキュラムの一貫として、毎年特別養護老人ホームにおいて、老人看護について実習を行っている。平成6年度の3学年については5日間の実習を行った。実習の具体的なスケジュールとカリキュラムは以下の通りである。実施月日：平成6年6月6日～7月2日。実施場所：社会福祉法人特別養護老人ホーム『山岸和敬荘』。この施設の特徴としては、病状安定期にあるものの比較的健康障害の程度の高い老人が多いこと、在宅サービス事業を実施していることである。実習は学生62名を1グループ15～16人の4グループとして、各グループは重複しないように1週間単位で、月曜から金曜までの5日間を実習にあてた。午前中は寮母と共に日常生活の援助などの業務を行い、午後の1時間は自由に老人とふれ合う時間とした。5日間のうち1日は在宅の老人に対する在宅サービスの実習に当てた。実習の評価は、2000字以上のレポートの形式によった。

学生たちに与えられたテーマは『私にとって老いとは』であり、以下、これらのレポートの評価を通して、実習が学生たちの老人観形成に

どのような影響を与えたか、その意義について論述する。

まずなによりも強調したいのは、実習が学生のそれまでもっていた老人観に与えた衝撃の深さであり、結果として、彼らが看護学生としての自覚と反省をもって、老人観を大きく変え始めた点である。それまで看護は精神的苦痛であると考えていたものが、老人に親近感さえもつようになり、かわいいとさえ思う意識が生まれたと記述している学生もいる。寝たきり老人の体の動きで、言葉以外のコミュニケーションも有りうるという認識や表情から反応を読み取るという看護への積極的なアプローチを具体的に記述した報告もある。老人たちとの接触を通して、自分もいつかは老いるという実感から、老いという問題意識からの逃避を反省し、老いの向かい合いと老いのマイナスイメージをプラスへと転化させる必要を強調する内容のレポートも複数みられた。老人の外面的なイメージから老いへの否定的な認識を反省し、老化を学問的にきちんと認識することへの意欲を示したものもある。福祉問題としての老いをとらえることで、老いを社会的問題として認識する芽生えと思われる記述も認められた。老いは社会的存在としての人間を希薄にしてしまうという認識を示し、そこから老人への接点の在り方を探っているものもあった。この学生は老いを自分の問題と認識することは所詮無理として、感傷的にならずに、老人看護の視点から、この問題をとらえている。老いは人生の余裕ではなく身体

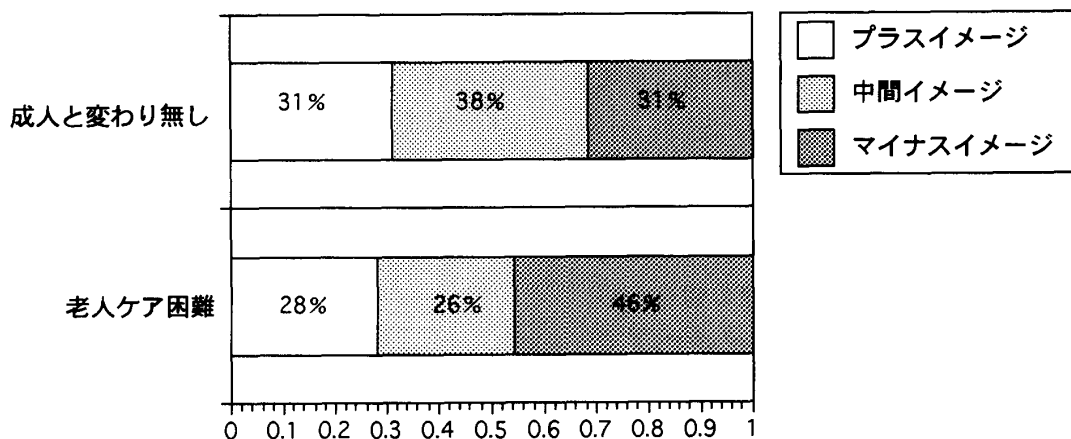


図8 老人看護困難性意識と老いのイメージの明暗

の衰え、精神の衰えと実感し、実習を通して、老人の多様さ、老いの在り方の多様さを改めて知ったと記載したものもある。この学生は排泄や食事は人間が生きて行くために最低限必要なことであり、なにも老人看護と身構えなくとも、当然の援助と気づいたと述べている。

子供のころの身近な体験から作り上げられた老人のマイナスイメージが実習を通して変化して行く様子がよく分かるレポートもあった。人間としての自己の確立の過程が老いの過程でもあり、老いの在り方の多様さを生み出していることに気づき、そのことを尊重すべきという認識を示したものもある。実習先で出会った老人たちの歴史の中に現在の自分という存在をもたらしてくれたものがあるという認識を示し、そのことへの感謝の気持ちを素直に表現しているレポートもあった。この学生は抽象的な老化というものはなく、現実の老化は多かれ、少なかれ常に社会との間の互いの影響しあいの中で形成されて行くという認識も示し、現在の自分の人間形成が自分の老いの在り方を決めて行くと感じたと述べている。幼児のころの体験に根ざす老人への畏敬から、青年期に入ってから老人蔑視の意識が、寮母との交流の中で、老人のイメージの変化をもたらし、老人の多様な在り方を改めて認識したというものもいた。

老いのマイナス面を率直に語ったものもある。この学生は無理をして老いの中にプラスイメージを求めるよりは、さまざまなマイナスを認めたくて、老人と対し、看護の難しさを認識している。老人もよそ行きの顔をもっており、そのことを在宅サービスの老人と居室利用者との間の対応の違いの中に感じているものもある。老後を穏やかに豊かに送るという願望、老いへの憧憬のようなものが、今回の実習によって全く変えられてしまったことを率直に述べているものもある。しかし、この学生は自分が抱いて来た老いのプラスイメージが、施設の老人たちのマイナスイメージ面に接することによって幻滅という反応の形をとらず、老人へのいたわりや尊敬に転化したのは、実習の成果だろう。

VI. 考 察

岩手女子看護短期大学においては、老人看護学は1年次の後期から本格的なカリキュラムが組まれている。したがって、看護学生として老人看護学を系統的に学ぶことになる時期は、専門基礎科目、基礎看護学および他の領域の各論的部分をかなりクリアした段階になる。言葉を換えれば、看護学生として一応のバックボーンが形成された時期とも言える。老人看護学が成人看護学の特殊な領域としてではなく、まったく質的に異なり、さまざまな複雑な問題を孕んだ領域であることを考えれば、看護教育全体のプログラムのこうした段階で、老人看護学のカリキュラムが用意されているのは、教育効果からみてたいへん適切な位置づけではないかと私たちは考えている。

現在、カリキュラム編成上、老人看護学に与えられた時間数は講義 90 時間、実習 45 時間である。この時間内で、学生は老人の特性、すなわち、老化とは何か、老人とは何か、老人における身体諸機能の年齢変化、身体構成の年齢変化、老人と死の関わりなどを導入部として、老人看護概論、老人保健、そして老人臨床看護に至るまで、老人看護学のすべての目次を学習することになる。限られた時間数の中で、よりよい教育効果を挙げるためには、教授する側にもさまざまな努力、工夫が求められるが、その一つとして、実習を含む授業前とカリキュラム消化後の学生たちの老人観の変化の把握がある。鳴海らはこれについての一連の研究報告の中で、とくに実習後の老人観の変化が大きいとしており、実習による老人との直接の接触の意義を強調している¹⁾²⁾³⁾⁴⁾。私たちも特別養護老人ホームにおける実習を通して老人イメージのプラス方向への変化を観察しており、さらに共同生活体験の有無を因子として加えると、共同生活を通しての老人との日常的な接触が肯定的イメージ形成に促進的な意義を有することを認めている。しかし、実習の在り方、内容によっては学生の老人イメージの形成に必ずしも肯定的効果をもたらすものではないとした大谷ら、池田らの報告も注目すべきである⁵⁾⁶⁾。カリキュラ

ムの時期、その内容などが学生の老人イメージ形成に影響していることを示唆する報告である。

今回私共が実習の対象とした特別養護老人ホーム山岸和敬荘は、盛岡市の郊外にあり、収容人員は160人で、常時満床の状態にある。施設・在宅を含めた医療福祉の職員は、施設長1名、生活指導員4名、寮母41名、看護婦9名からなっている。施設の特徴として、比較的健康障害の程度の高い老人が多いこと、在宅老人の在宅サービス事業を行っていることがあげられる。学生は食事介助、排泄介助、体位変換、などの日常生活の援助を施設のスタッフの指導の下に、あるいは協同して行う機会が多い。こうした実習の状況が老人との緊密な接触や寮母（介護福祉士）を始めとするスタッフとの人間的な交流を生み出すことにもなり、イメージ的にはかならずしも明るいとは言えない実習環境の中で、むしろプラスイメージを形成する因子ともなっている。

前述したように老人との共同生活の有無も学生の老人観形成の背景因子として重要である。現在、我が国における家族構成は確実に核家族化に向かっている。岩手県においても、都市周辺ではその傾向が及びつつあるものと思われるが、それでも3世代、4世代家族の存在においては、まだ東京近辺などとは格段の差が認められるに違いない。今回の調査でも、学生62名のうち、37名60%が共同生活体験ありとしており、そのうちの半数以上が15年以上の共同生活期間と回答している。これら学生達は日常的な共同生活を通して、健康な老人、老人の知恵、老人の経験の豊かさというものを具体的に見聞きしており、こうしたことが老人への肯定的イメージ形成の厚い背景となっている。

しかし、老人との共同生活は求めて得られる条件ではない。老人との接触が老人のイメージ形成にとって有意義であるのなら、実習の場の選択によって類似の条件を作り出さなければならない。今回対象とした特別養護老人ホームは比較的健康障害程度の高い老人が多いにもかかわら

ず、施設のスタッフの指導や交流を通して老人イメージのプラス方向への転化という積極的役割を果たしてくれたが、老人の有りようの多様性を考えるとき、実習の場の選択肢もまた多様でなければならないであろう。山崎らは、特別養護老人ホーム、老人保健施設の入所老人を対象とした老いのセルフイメージに関する調査研究報告の中で、ADLは老いのセルフイメージとは相関しないが、ADLの自立群は介助群に比べて社会との関わりをより肯定的に受け取っていると述べている⁷⁾。学生が実習において、社会的広がりを感じている老人と接する場合と、社会的に疎遠であると感じている老人に接する場合とでは、彼らの老人観形成に異なった影響を与えることは必至であろう。小山は我が国における老人保健施設が設立母体、規模、サービスの内容、対象老人の重症度などさまざまな面で格差や違いがあることを指摘している⁸⁾。実習の場の多様な選択とは、こうしたことを念頭に置いて、施設ごとの特色を考慮しつつ、実際的な組み合わせによって、より効果的な実習カリキュラムを立てることであるかもしれない。今後の課題としたい。

老人看護学のカリキュラムが終わったとき、学生たちはその向こうに何を見るか。彼らが将来一線に身を置くと、私たちも老人看護学教育に携わるものも採点のない評価を受けることになる。

Ⅶ. おわりに

看護学生の老人観形成を老人福祉施設における実習および老人との共同生活体験の有無の観点から検討し、実習や共同生活体験が学生の老人にたいするプラスイメージ形成にとって有意義であることが分かった。今後はこの結果を生かして、実習を中心とした老人看護学の教育カリキュラムの改善に努めたい。

稿を終るにあたり、ご協力いただいた山岸和敬荘のスタッフ、利用者のみなさまに感謝いたします。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 1) 鳴海喜代子、野口美和子、土屋陽子、井上幸子、加藤敏子、藤沢里子：看護学生の老人観に関する研究 第一報、千葉大学看護学部紀要、7、1-9、1985
- 2) 鳴海喜代子、野口美和子、土屋陽子、井上幸子、加藤敏子、藤沢里子：看護学生の老人観に関する研究 第二報、一老人看護の講義受講後の変化一、千葉大学看護学部紀要、8、11-18、1986
- 3) 鳴海喜代子、佐藤敏子、藤沢里子、永江美千代、正木治恵、土屋陽子、野口美和子：看護学生の老人観に関する研究 第三報、一臨床実習終了後の変化一、千葉大学看護学部紀要、10、13-21、1988
- 4) 鳴海喜代子、永江美千代、佐藤敏子、藤沢里子、正木治恵、宮本千津子、野口美和子：看護学生の老人観に関する研究 第四報 一看護学部学生の講義、及び実習前後の変化一、千葉大学看護学部紀要、12、11-19、1990
- 5) 大谷英子、松木光子：看護学生の老人イメージと老人ケアに対する姿勢の変化、第22回日本看護学会集録（看護教育）、83-87、1991
- 6) 池田敏子、伊東久恵、太湯好子、人見裕江、桜井桂子、清田玲子、太田雅子、近藤益子、安藤佐記子、阿式明美：老人に対するイメージとその形成に影響する因子、第22回日本看護学会集録（看護教育）、90-92、1991
- 7) 山崎摩耶、林ひとみ、網本 和：老いのセルフイメージに関する調査研究、帝京平成短期大学紀要、3、93-99、1993
- 8) 小山秀夫：老人保健施設の実態について、看護、46（6）、190-198、1994
- 9) Sugawara, T. and Takahashi, F.: The Effect of Prior Experience and Nursing Education on the Image of the Elderly and the Geriatric Patient, Bulletin of Iwate College of Nursing, 1, 81-87, 1993